

## 〔再録〕政教社のナショナリズムと井上円了の「護国愛理」

著者	田中 菊次郎
雑誌名	井上円了研究
巻	2
ページ	35-84
発行年	1984-03-14
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00006755/">http://id.nii.ac.jp/1060/00006755/</a>

# 政教社のナシヨナリズムと

## 井上円了の「護国愛理」

田 中 菊次郎

### 目 次

#### I 政教社の人々

- 一、明治二〇年代の自立
- 二、雑誌「日本人」と新聞「日本」
- 三、ナシヨナリズムとその主役たち
- 四、ナシヨナリズムの思想
- 五、マスコミの戦い

#### II 井上円了の護国愛理

- 一、「日本人」における円了
  - 二、哲学館から「日本主義の大学」へ
  - 三、「護国愛理」の狼火
- III まとめ

#### I 政教社の人々

#### 一、明治二〇年代の自立

明治二〇年代は近代日本の一つの転機となった。維新の激動のあと、世をあげての文明開化は、殖産興業と自由民

権の二つの路線を導き起こし、明治一〇年代は強烈な政治的季節として色どられた。この中心となった自由民権運動が挫折し、その土壌のうえに、明治二〇年代のナショナリズムが生まれた。

自由民権運動は、理論的根拠として一九世紀の産業ブルジョアジーの思想を、その出生の戸籍としていた。ミルの自由論、トクビルのアメリカ・デモクラシー論、さらにスペンサーの代議政体論、社会平権論などが広く読まれ、熱狂的な歓迎を受けたといわれる。<sup>\*1</sup>

民権運動は政府の相つぐ弾圧によって挫折したけれども、天賦人權、四民平等、国家権力と個人の自由との調節、政治の改良、人間社会の進化などの諸原理を、大きな遺産として残した。いや、それらの遺産はなお死滅しないもの、受け継ぎ、さらに発展させるべきものとして、次代に伝えられたのである。自由民権運動が提起した国家思想は、各地の民権家の私擬憲法草案の形で広く論議され、人民主権、君主主権、君民共治の三つの形態が相争われた。

この論争は明治二二（一八八九）年に發布された大日本帝国憲法において、いちおうの政治的結論が出され、明治二三（一八九〇）年の第一回総選挙、ついで第一通常議会となる。民権運動の政治的季節は、こうして議会開設に吸収された形で終るのである。自由民権の「圧制政府顛覆」の叫びは、民党の「藩閥打倒」の戦いに転換した。維新以来の日本の大きな結節点である。

こうして明治二〇年代がはじまる。この時期は日本の思想、文化からみて、やはり一つの転機となった。黒船来航の嘉永六（一八五三）年からすでに三十余年、鎖国から開国へ、そして近代文物の日本上陸を迎えて、維新政府が文明開化の名の下に、ひたすら欧化政策の中に日本改造の道を求めて、早くも二〇年、社会はまさに変わりつつあった。いわば啓蒙時代は自立時代に移った。啓蒙主義者福沢諭吉の活躍、自由民権家の戦いは、啓蒙時代を特徴づけるものがあった。

明治二〇年代は、啓蒙期を通しての「自立の時代」の出発である。自由民権というシンボルに代わって、平民主義、国民主義、日本主義が新しいシンボルとなる。すぐれて政治的であった明治一〇年代に代わって、二〇年代は思想、文化の各分野にわたって多面的な創造が展開された。政府の欧化政策の下で窒息していた日本文化が復興した。

このようにして、日本文化の復興・創造になったのは、色川大吉によれば、「明治の青年」二次世代（一八六〇年代生まれ）であったという。一八六〇年代といえは、万延元年から文久、元治、慶応を経て明治二年に至るわけであるが、もちろんその前後も含まれている。これらの二次世代は明治二〇年代に青春を迎え、自由民権運動にあるいは参加し、またその崩壊を目のあたりにみた。一〇年代は国家とは何か、人民とは何かという国民意識を形成する実験装置であった。明治二次世代は国家・民族の独立、個人の自由・平等が自覚され、自立的にその方法手段を選択する、そうした転機をつかんだ人々である。

いまここに「明治の青年」二次世代をリスト・アップすることによって、その理解を早めることにする。（数字は生れ年・西暦<sup>\*2</sup>）

哲学・宗教 植村正久（一八五八）井上田了（一八五八）三宅雪嶺（一八六〇）内村鑑三（一八六一）大西祝（一八六四）西田幾多郎（一八七〇）

思想 陸羯南<sup>くがくなん</sup>（一八五七）片山潜（一八五九）横井時敬（一八六〇）酒井雄三郎（一八六〇）徳富蘇峰（一八六三）志賀重昂<sup>しげたか</sup>（一八六三）巖本善治（一八六三）山路愛山（一八六四）津田梅子（一八六四）内田魯庵<sup>ろあん</sup>（一八六八）木下尚江<sup>なかせ</sup>（一八六九）田岡嶺雲（一八七〇）幸徳秋水（一八七二）

學術 梅謙次郎（一八六〇）牧野富太郎（一八六二）南方熊楠<sup>みなみくまくす</sup>（一八六七）

文学 坪内逍遙（一八五九）森鷗外（一八六二）二葉亭四迷（一八六四）正岡子規（一八六七）夏目漱石（一八六九）幸



田露伴（一八六七）徳富芦花（一八六八）尾崎紅葉（一八六八）北村透谷（一八六八）山田美妙（一八六八）高山樗牛（一八七二）国木田独步（一八七二）島村抱月（一八七二）田山花袋（一八七二）徳田秋声（一八七二）

美術 浅井忠（一八五六）岡倉天心（一八六二）黒田清輝（一八六六）横山大観（一八六八）

このリストは明治文化が、いっせいに開花したことを示している。明治三〇年代の社会主義もまた、その人脈をここに準備している。江戸時代の価値意識を乗り越えて、近代的価値意識がつぎつぎに広範な領域を開拓したのである。こうした価値の転換は、明治初期の海外留学生や政府のお雇い外人によって、徐々に進められてきたものであるが、明治二十年ころには、お雇い外人に代わり得る日本の頭脳が成長したことが大きくものをいった。日本の技術が外人の政府顧問から解放され、ようやく自立性を確立したのは明治一八（一八八五）年といわれるが、フェノロサやモリスらに教えを受けたのは、この二次世代の人々であった。日本の思想、文化が自立して、独自の道を歩むのも、けだし当然のことであった。

明治二〇年代のナシヨナリズムは、こうした背景の下に、自由民権運動と同時代の産物として、ある意味ではその継承者としての共通性を保ちつつ、誕生するのである。

# 〔註〕

\*1 自由民権の理論的支柱となった主な著書――

J・S・ミル著中村正直訳「自由之理」（明治五年刊）

トクビル著・小幡篤次郎訳「上木自由論」（明治六年刊）――上木は出版の意

ルソー著・服部徳訳「民約論」（明治一〇年）

スペンサー著・尾崎行雄訳「権理提綱」（明治一〇～一二年刊）

スペンサー著・鈴木義宗訳「斯边撒氏代議政体論」(明治一一年刊)

スペンサー著・松島剛訳「社会平権論」(明治一四年刊)

モーア著・井上勤訳「良政府談」(明治一五年刊)——ユートピアの訳

ルソー著中江兆民訳「民約訳解」卷之一(明治一五年刊)

その他ベンサム、アダム・スミスらも明治一〇年代後半に紹介されている。

\*2 「明治の青年」二次世代——色川大吉「明治精神史」(下) p.73~p.75 (講談社学術文庫二〇・昭和五一年七月) この世代

の特徴は、政治主義的な価値意識への多様な懷疑と、問題関心の分散化、ナショナリズムへの心情を共有していた。なお「明治の青年」一次世代は主として一八五〇年代生まれとされ、啓蒙主義の洗礼をうけて維新期に成長した人々で河野広中、末広重恭、矢野文雄、馬場辰猪、星亨、小野梓<sup>（梓）</sup>、末松謙澄、大石正己、田口卯吉、金子堅太郎、伊東巳代治、原敬、奥宮健之、植木枝盛<sup>（えもり）</sup>らを挙げている。

\*3 「日本技術の自立性」——色川大吉「近代国家の出發」日本の歴史二二、p.271、p.465 (中央公論社・昭和四一年) 明治の最初の一八年間に、わが国の資本主義文化の形成に力を貸した外人顧問は五百人に近く、のべ滞在人員は三千人を越えたが、外人技術団は十数年で日本人技術者にとってかわられた。

## 二、雑誌「日本人」と新聞「日本」

さて、明治二〇年代のナショナリズムを代表するものは「政教社」である。政教社は明治二二(一八八八)年、三宅雪嶺(雄二郎)・志賀重昂<sup>（しげたか）</sup>らを中心として結成された文化・思想集団で、国粹主義・日本主義の国民運動を志した。社員は当初一人、のち三〇人となるが、運動の第一着手として、この年四月雑誌「日本人」(半月刊)を創刊した。

「日本人」創刊号(明治二二年四月三日)は発刊の辞で、その目的をつぎのように明かにする。

「当代ノ日本ハ創業ノ日本ナリ然レバ其経営スル処、<sup>ウタ</sup>転々錯綜湊合セリト雖モ今ヤ眼前ニ切迫スル最重要最大ノ問題ハ蓋シ<sup>ケダ</sup>日本人民ノ意匠（註・考へ、理念）ト日本国土ニ存在スル万般ノ<sup>ウタ</sup>困外物（註・環境）トニ恰好スル宗教・教育、美術、政治、生産ノ制度ヲ選択シ以テ日本人民が現在未来ノ嚮背ヲ裁断スルニ在ル哉」

すなわち維新から二〇年、転換期にある日本の当面の諸問題に対して、人民の自立的な選択・判断を求めたのである。そして「予輩同志」として、巻頭につぎの人々を列記している。

文学選科卒業 加賀 秀一

農学士 今 外三郎

島地 黙雷

東京英語学校教頭 松下 丈吉

文学士 辰巳小次郎

文学士 三宅雄二郎

農学士 菊池熊太郎

文学士 杉江 輔人

文学士 井上 円了

文学士 棚橋 一郎

農学士 志賀 重昂

また、政教社の資金源としては谷干城<sup>たみき</sup>、杉浦重剛<sup>しげたけ</sup>らが控えていた。十一人の同志のほかに杉浦重剛、宮崎道正、中原貞七が主な執筆者であった。

創刊第一号は、志賀重昂が『日本人』の上述を饒けす<sup>ニ</sup>を巻頭論文とし、その目的と希望を述べ、杉浦重剛「日本学問の方針」、松下丈吉「政党の起る所以を論ず」、井上四了「日本宗教論」、辰巳小次郎「日本人の外人尊奉」、今外三郎「日本殖産策」、杉江輔人「士氣振ふ可し」、菊池熊太郎「処世論」などの文化・政治・経済に関する諸論文を飾って、発刊の辞の裏付けとした。

政教社の人々は当時の思想界の指導者たちであった。「日本人」の登場の意義と反響を「明治政史」はこう伝えた。

「四月三日雑誌日本人世に出づ、嚮に伊藤、井上の二伯内閣の柄を握るや欧米の開化を輸入するに余念なく風俗習慣悉く泰西の風に変ぜんとし上下靡然<sup>びぜん</sup>として之に従ひ、降て雑誌国民の友の発行あり、是も亦主として泰西に擬するを唱へ頻に基督教主義を吹聴せしが、夏去り秋来り此に日本人なる雑誌出で確乎として国粹保存の必要を説き以て彼欧化主義に反対す、其効驗千歳没すべからざるものあり、殊に此雑誌は文学士三宅雄二郎同井上四了農学士菊池熊太郎同志賀重昂及杉浦重剛島地黙雷諸氏の執筆なるを以て其一世を風動するも亦宜なり」<sup>\*1</sup>

発行部数は創刊当初は五、六百部、のちに三千部となるが、その道は平担ではなかった。そのことについてはのちに述べる。

翌二二（一八八九）年二月新聞「日本」が陸羯南<sup>くがくなん</sup>を主筆兼社主として創刊される。支援者は「日本人」と同じく谷干城、杉浦重剛であった。陸羯南は国民主義を首唱し、明治政府の欧化主義に反対し、国民精神の回復を主張した。「日本」創刊の辞は伝える。

「一個人と一国民とに論なくいやくも自立の資を備うる者は、必ず毅然侵すべからざるの本領を保つを要す。近世の日本はその本領を失ひ自ら固有の事物を棄つるの極、殆ど全国民を挙げて泰西に帰化せんとし、日本と名づくるこの島地は漸く特に輿地図（註・世界地図）の上にただ空名を懸くるのみならず、……日本国民は方に渦水の上に

漂ひて其根柢を失ふものゝ如し、「日本」は自ら摧らず（註・くじけず）此漂揺せる日本を救ひて安固なる日本と為さんことを期し、先づ日本の一旦忘失せる国民精神を回復し且つ之を發揚せんことを以て自ら任ず<sup>＊</sup>」

「日本」の第一特色は羯南、雪嶺の日本主義の主張にあった。のち福本日南も論陣に加わり、社員は宮崎道正、国分青厓、古島一雄、桂湖村のほか、のちには池辺三山、中村不折、正岡子規が入社する。<sup>＊2</sup>

創刊当初は主筆兼社主に陸羯南があり、乾坤社の杉浦重剛が編集監督、同宮崎道正が会計監督ということで、乾坤社と共同経営の形をとり、資金面は浅野長勲、谷干城、三浦梧棲らが援助した。<sup>＊3</sup>羯南が社長兼主筆として経営と編集の責任をになうのは、明治二三年三月からとされている。<sup>＊4</sup>

さきに雪嶺の名をあげたが、「日本人」同志たちが、「日本」に全面的に協力したことは注目される。「日本人」と「日本」は杉浦重剛の乾坤社、さらにこれを拡大した「政教社」グループの双生児であった。そして、その同志は明治の官僚機構からはみ出した人々が中心をつくっていることは、政教社グループの権力への抵抗を如実に示していた。<sup>＊5</sup>

「日本人」のスタッフは哲学館系と東京英語学校系の二つから成り立っている。哲学館は井上円了の創設したものであるが、東京大学出身者が、哲学館に勤めていた。三宅雪嶺、加賀秀一、島地黙雷、辰巳小次郎、棚橋一郎、そして井上円了を加えて六人。東京英語学校関係者の多くは札幌農学校の出身であった。志賀重昂、松下丈吉、菊池熊太郎、今外三郎、杉江輔人の五人。いずれも官僚とならず、あるいは官途を辞任して、自主独立の道を選んだ人々である。「日本」の陸羯南もその一人であった。

「日本人」創刊の中心人物は三宅雪嶺と志賀重昂であるが、雪嶺は明治一六年東京大学文学部哲学科を卒業した。円了は同哲学科を卒業したのは明治一八年であるから、雪嶺の方が二年先輩であるが、年齢的には円了が二つ年長で

あった。しかし島地黙雷（一九三八～一九二一）は、はるかに大先輩で明治五（一八七二）年に外遊した洋学僧として知られ、政教分離や信教自由のために活躍し、明治七年には真宗各派を大教院から分離させることに成功させた先達であった。<sup>\*6</sup>

辰巳小次郎、棚橋一郎は明治一九年ころ第一高等学校（旧大学予備門）を退職して、哲学館に関係し、雪嶺と同僚になった。<sup>\*7</sup>

志賀重昂、菊池熊太郎、今外三郎は札幌農学校で宮崎道正に教えを受けた縁故から東京英語学校に勤めた。東京英語学校は杉浦重剛が宮崎道正らとともに創立したものであった。<sup>\*8</sup> 宮崎道正は明治一〇年東京大学卒で杉浦重剛と同級であった。<sup>\*9</sup>

三宅雪嶺はこれらの同志と相談って「政教社」を結成したのである。

さて井上円了であるが、円了は東京大学在学中の明治一七年、三宅雄二郎、志賀重昂、棚橋一郎らとともに、学院の中に「哲学会」を創設し、加藤弘之、西周、中村正直、西村茂樹、外山正一、原坦山、島地黙雷、大内青巒らの先輩の参加を得て、月一回研究会を開いた。また明治一九年には「不思議研究会」を三宅雄二郎、棚橋一郎らと結成した。明治二〇年に棚橋一郎と「哲学書院」を創立し、哲学会の機関誌として「哲学会雑誌」を発行し、編集代表に円了が推された。「日本人」同志との関係はこのころから密接であった。<sup>\*10</sup> 円了はこの年「仏教活論序論」を著している。円了の日本主義の中の位置づけについては、のちに述べる。

#### 〔註〕

\*1 「日清・日露戦争」藤井松一・国民の歴史二〇、p 40（文英堂昭和四四年）

\*2 正岡子規Ⅱ明治二五年一月「日本」に入社、俳壇革新につとめた。子規は明治二八年「日本」記者として日清戦争に従

軍した。金州、旅順など現地一カ月の短期間であった。「<sup>だつとも</sup>癩癩書屋俳話」は入社する前に、二五年夏「日本」に寄稿したものである。

\*3 乾坤社Ⅱ杉浦重剛は明治一八年七月千頭清臣、宮崎道正、増島六一郎、松下丈吉らと共に東京英語学校を創立し、一〇月大学予備門長を辞任、明治二〇年五月乾坤社を創立した。日本主義の団体とみられる。重剛は明治二十一年「日本人」発行に尽力し、二二年条約改正反対運動に参加、日本倶楽部を起す（猪狩史山、中野刀水著「杉浦重剛座談録」年譜P196、岩波文庫）

\*4 創刊当初Ⅱ陸羯南全集第二巻解説（みすず書房 一九六九・四）

\*5 「新しい国民像の追求」鹿野政直、近代日本政治思想史Ⅰ、p243～p244（有斐閣昭和四六年）

\*6 大教院Ⅱ維新政府は明治元年神仏分離令を発し、この布告を排仏と解した神道系の地方官吏や神官が仏教の堂宇・仏像・経巻に対して破壊的行為に出たので、仏教の護法運動が起った。政府の神道国教化政策は教導職を置いて神仏合併の大教院設立となり、神仏混淆へと外面的な修正を行なったが、真宗の盛んな三河・大浜における農民の護法一揆などの反排仏機運を背景に、黙雷は政教分離と信教の自由を掲げて、政府の無定見な教導政策に対して、仏教の側からの神仏分離を宣言し実行したのである。（「明治の新仏教運動」池田英俊、p60～p63・吉川弘文館 昭和五十一年）

\*7 「三宅雪嶺」長谷川如閑・三代言論人集第5巻・p262（時事通信社昭和三八年）

\*8 同上・p262

\*9 「杉浦重剛座談録」前掲・p49

\*10 「明治の新仏教運動」前掲・p238～p239

三、ナシヨナリズムとその主役たち

明治二〇年代のナシヨナリズムは、ひと口に日本主義といわれるが、その主役たちの問題意識には、それぞれに特

徴がある。雪嶺、重昂の「日本人」は国粋主義と唱え、国粋とは *Nationality* を意味するとし、羯南の「日本」は国民主義と呼び、*国民*（ネーション）を基として他国民に対する独立特殊の性格を包括したもの<sup>\*1</sup>としている。

国粋主義、国民主義と対立するものは欧化主義である。欧化主義は当時の日本政府、伊藤博文首相と井上馨外相に代表され、鹿鳴館に象徴される大きな風潮であった。

「明治二十年四月二十日、首相官邸において伊藤博文首相主催の仮装舞踏会が、内外の貴顕・名士その夫人・令嬢らを一堂に集めて行なわれた。……滔々たる欧化の風潮は一般社会に文化・風俗の急進的な改良運動となつてひろがつた。ローマ字会がつくられ、書方改良・言文一致の運動がおこり、演劇・講談・歌舞伎の改良、小説・音楽・美術の改良から、衣食住の洋風化がさかんに唱えられた。そして、ついには「大和民族をかえるにコーカサス人種を以てすべし」という人種改良論まで登場した<sup>\*2</sup>という。

それは文明開化路線の一つの帰結でもあったが、一方に政府の意図的な欧化政策のなかで条約改正交渉が進められた。幕末に結ばれた安政五（一八五八）年の五カ国条約は治外法権（領事裁判権）と低率関税（輸出入税は協定できめ、関税自主権を否認）とを認めていることから、不平等条約の見本とされ、その改正のための外交交渉がいく度か繰り返されてきた。正式な条約改正会議が明治一九（一八八六）年各国との間に開かれ、英独から条件付で治外法権の撤廃が提案された。その条件は

- 一 刑法、民法等の法律は実施前に外国に通知する（外国側があらかじめ審査する）
  - 二 控訴院は外人法官が過半数をしめる（外人法官は外人法官だけで組織する懲戒裁判所の請求がなければ罷免できない）
- というもので、井上外相はこの提案を基礎に立案され、以上の二点を認めたほか、領事裁判は条約改正後三年間は存続させる、また居留地外にも外国人の居住を許すという、いわゆる「内地雑居」を認めたものであった。



これでは治外法権の撤廃どころか、独立国としてはさらに大きな制約が加わるものであり、一方的な譲歩であり、妥協である。谷干城農商務相は明治二〇（一八八七）年、井上案に反対して辞職し、外人顧問ボアソナード、勝安房らも反対した。政府はついに改正交渉を中止し、井上外相は辞任した。条約改正反対に結集する日本主義・国民主義者が、世論の背後にあった。

谷干城を中心に国民主義者は日本学会を組織し、日本倶楽部を創設して、広く世間に呼びかけた。日本学会は谷干城、杉浦重剛、三浦梧楼、佐々木高美、福富孝季、佐佐友彦、柴四朗に陸羯南が参加した。杉浦重剛はこの年すでに同志による新聞発行の連判状を作って、マスコミによる国民主義運動の展開を準備していた。政教社による「日本人」の発刊、そして陸羯南の「日本」の創刊は杉浦らの計画が実現されたものである。連判状には、巖谷立太郎（小波の兄、平賀義美、宮崎道正、谷田部梅吉、長谷川芳之助、小村寿太郎（日露戦争時の外相）、高橋健三（のち朝日新聞客員・主筆）、谷口直貞、中村弥六、河上謹一、伊藤新太郎、西村貞、千頭清臣（のち東京日日新聞社長）、国府寺新作、手島精一、高橋茂らが署名した。<sup>\*3</sup>これらの一人一人について、筆者はつまびらかではないが、明治二〇年後藤象二郎が起こした反政府の大同団結運動の周辺にあった人々とみられる。

というのは、「日本」の前身である「東京電報」が「大同団結運動の一機関紙としての性格をもった」と<sup>\*4</sup>とされているからである。「東京電報」は明治二十一年、日本橋蠣殻町にあった株界の新聞「東京商業電報」を羯南が譲り受けて改組したものである。商業電報は内閣官報局長青木貞三が退官し東京米穀取引所長となつて経営した新聞であつた。高橋健三は局長代行、その下に陸羯南は官報編集課長をつとめていた。羯南は旧友一戸兵衛を介して谷干城とは早くから知己の間柄で、谷干城が大臣の職をなげうって条約改正反対の行動に出たことが、同志としての羯南の血をかき立てたのであろう。羯南もまた官報局をやめて、谷干城、杉浦重剛らの日本主義運動に立ったのである。高橋は連判

状の一人であり、羯南のジャーナリストとしての目覚め<sup>\*5</sup>を契機として新聞発行に踏み切った。こうした谷干城、杉浦重剛、高橋健三、宮崎道正、小村寿太郎らの後援によって、羯南は「東京商業電報」改め「東京電報」の社長となった。東京電報は政治経済論に重点がおかれたので、日本橋の株式新聞の前身との違和感から新聞としてはふるわなかった。一日の平均発行部数は四一五部に過ぎなかった。羯南はこれを「日本」と改題して、その志を直截に表わして再出発した。

なお、「日本」のスタッフ福本日南(誠や国分青厓(高胤)らは羯南の法学校時代の同級生であり、のちの平民宰相原敬とも同級であった。ともに明治一二(一八七九)年法学校における賄征伐で退学処分を受け、放逐されたあと放廃会という名の会をつくった仲であった。<sup>\*6</sup>

ここにおいて、「日本人」と「日本」の主役たちの連帯が、ほぼ明かにされたことと考える。

#### 〔註〕

\*1 「国民主義」Ⅱ「ナショナリストたちの肖像」鹿野政直、p.29 「日本の名著」三七、中央公論社・昭和四六年

\*2 「欧化の風潮」Ⅱ「日清日露戦争」藤井松一、p.38、「国民の歴史」二〇、文英堂・昭和四四年

\*3 「連判状」Ⅱ「三宅雪嶺」(第一部・評伝)長谷川如是閑、p.270 「三代言論人集」第五巻、時事通信社 昭和三八年△「杉浦

重剛座談録」、猪狩史山・中野刀水著、p.77、岩波文庫 昭和一六年

\*4 「ナショナリストたちの肖像」鹿野政直、p.28 (前掲)

\*5 「ジャーナリスト」Ⅱ陸羯南は青森新聞に入社し、編集長名義であったので、反官的記事でさんぼう律による罰金二〇円に処されたことがある。

\*6 「ナショナリストたちの肖像」鹿野政直、p.22 (前掲)

#### 四、ナシヨナリズムの思想

国粹主義・日本主義・国民主義のグループは「日本人」と「日本」によって、藩閥政府の欧化政策に真っ向から対立し、欧化病に対しては日本固有の文化を提示し、条約改正に対しては断乎たる反論をもって、日本の独立、人民の自覚、国民精神の回復をひろく訴えたのである。その主役を志賀重昂、三宅雪嶺、陸羯南にしぼって、明治二〇年代のナシヨナリズムの思想をたどることにする。

国粹主義・日本主義は志賀重昂の「南洋時事」（明治二〇年刊）、「日本風景論」（明治二七年刊）、三宅雪嶺の「真善美日本人」「偽悪醜日本人」（いずれも明治二四年刊）の名著として結晶し、国民主義は陸羯南の「近時政論考」（明治二四年刊）の名著を世に贈った。いずれも明治思想を代表するものである。

志賀重昂（一八六三—一九二四）は明治・大正時代の地理学者であった。岡崎の出身。明治一七（一八八四）年札幌農学校を卒業し、同一九年南洋（マツクサイ島、濠州、ニュージールランド、フィジー島、サモア、ハワイなど）を巡遊し「南洋時事」を著した。一村落が消滅するというようなアングロサクソンの侵略の苛烈さをまのあたりにみて、白人帝国主義への危機感に触発された重昂は、日本の独立をいかにして守るかを問うた。条約改正にいう内地雑居などは、とてもない。日本内地を外人に開放するなら、自由競争によって日本人は圧倒されて、南洋諸島の住民の運命をたどるであろう、と警鐘を打ち鳴らした。大和民族は、しかし、優良種に進化改良し得る可能性がある。それは生物学の原則として保障されている。「日本今日の急務は立国の根本を確立するにある」そのためには、まず民力を養い「鋭意貧弱を救拯<sup>ききようしきう</sup>」することだ。として、「日本人」誌上に「日本民族独立の方針」を明かにした。日本民族の思想を独立せしめる事（国粋主義）、日本民族箇々の勢力を物併する事（大同団結）、日本民族箇々の実力を増殖する事（殖産興業）こ

れである。<sup>\*1</sup>

「日本風景論」は日本国土の美を説き、それが外国の自然と比して、より美しいことを説明しようとした。日本の四季、山河、生物、植物などの固有の美を流麗な文をもって紹介し、当代のベスト・セラーとなった。

三宅雪嶺（一八六〇—一九四五）は金沢の人、明治一六（一八八三）年東京大学文学部哲学科を卒業し、東京大学に勤め日本仏教史の編集に当たったが、機構改革によって文部省編輯局に移り、明治二〇（一八八七）年辞任した。官僚からはみ出したのである。雪嶺は大学卒業の翌年、秩父事件を現地視察に行き「しいたげられたもの、追いつめられたものへの強烈な関心」<sup>\*2</sup>を示し、「日本人」が第九号（明治二一・八・三）に高島炭坑「三千の奴隷を如何にすべきや」の雪嶺の論文をはじめとするキャンペーンを行ったのも、自由民権の同時代人としての共感からであつたろう。雪嶺はその後明治四〇（一九〇七）年には谷中村の強制破壊を、田中正造の案内で、その眼で確めている。「過渡的社会の文筆家においては」とハーバード・パッシンのいうように「政治と文学とジャーナリズムが一点に合流する」<sup>\*3</sup>のである。雪嶺は視野の広い思想家であり、ジャーナリストであつた。

長崎の高島炭坑キャンペーンは、「日本人」第六号（明治二一・六・一八）の松岡好一の潜入四カ月のルポ「高島炭坑の惨状」で切つて落されたが、九号の大特集の巻末には編集人として長崎県平民松岡好一が入社したことを明かにしており、政教社が単なるエリートの集りでなく、同志的グループであつたことを物語っている。「日本人」は創刊一年後の第二四号（明治二一・五・七）に社員に中原貞七、宮崎道正の名を加え、一名から一三名となった。しかし、ここではもう松岡好一の名はない。あるいは大三菱に敢然と挑戦した松岡を一時庇護したものであつたのかも知れない。

「真善美日本人」「偽悪醜日本人」は「日本人」がしばしば発売禁止となつた、その空白をうづめるために著述さ

れたもので、日本人は白人の欠陥を補い、円満幸福の世界に進む任務がある。日本人の能力を阻止している社会的制度的欠陥を除くべきであると主張した。「真善美日本人」の題字下には、黒地に白抜きで「自国の為に力を尽すは世界の為に力を尽すなり、民種の特色を發揚するは人類の化育（註・カルチュア）を裨補するなり、護国と博愛と爰ぞ撞着すること有らん」と雪嶺らの日本主義が、開明的な国粹主義であることを宣明している。

陸羯南（一八五七—一九〇七）は本名・実、津輕藩士の出身で、司法省法学校、青森新聞をへて、太政官文書局に入り、内閣官報局編集課長となり、そのままではおさまらず「日本」創刊のために飛び出したことはさきに触れた。羯南は「日本」第一号の巻頭に、個人と国民の自立を謳い、欧化主義の渦巻の中に失われた国民精神を回復することを宣言したこともさきに述べた。創刊の辞はこれに続いている。

『日本』は国民精神の回復發揚を自任すと雖も、泰西文明の善美は之を知らざるにあらず、其の權利自由平等の説は之を重んじ、其哲学道義の理は之を敬し、其風俗習慣も或る点は之を愛し、特に理学、經濟、實業の事は最も之を欣慕す。然れども之を日本に採用するには、其泰西事物の名あるを以てせずして只日本の利益及び幸福に資するの實あるを以てす。故に『日本』は狹隘なる攘夷論の再興にあらず、博愛の間に国民精神を回復發揚するものなり」

これは雪嶺の護国博愛を、別の角度からとらえたもので、国民主義は排外主義ではなく、西欧のよきものは日本の利益・幸福という立場から吸収しなければならないとした。そしてさらに続けて述べる。

『日本』は外部に向て国民精神を發揚すると同時に、内部に向ては国民團結の鞏固を努むべし、故に『日本』は國家善美の淵源たる皇室と社會利益の基礎たる平民との間を近接ならしめ、貴賤貧富及都鄙の間に甚しき隔絶なからしめ、國民の内に權利及幸福の偏傾なからしめんことを望む。<sup>\*4</sup>『日本』は國民の富力を増さんが為め實業の進歩を期し國民の智力を増さんが為め教育の改良を期す」

羯南の政治論の二本柱は自由主義と平等主義の原則であった。その政論集は「近時政論考」にまとめられたが、羯南は国民主義が欧化風潮に反対して起こったこと、またそれははじめて「日本人」において世に現われ、これを発揚するに寄与したものは「日本」であるという。羯南は自由平等の原則に立って「国際上の対等権利は一日も屈辱すべからず」とし「他の政論派は欧米諸国民の富強を以て、その人種固有の能力に帰し、到底東洋人種の企及すべきにあらずと断ずれども、王公将寧<sup>ワウキウ</sup>んぞ種<sup>しゆ</sup>あらんや、国民論派<sup>ナシヨナリスム</sup>（註・国民主義）は一国民自身の位地よりして、またその本分よりして、彼の自然的優劣論をば痛く排斥するものなり」と、人種平等論の立場を主張した。それは重昂の生物論的立場とは異なるものであったが、互いに共感できるものであったとみられる。

丸山真男は「陸羯南―人と思想」で羯南が明治二〇年代の日本主義運動の最も輝けるイデオログの一人として、「外国勢力に対する国民的独立と内における国民的自由の確立という二重の課題を負うことによって、デモクラシーとナシヨナリスムの結合を必然ならしめる歴史的論理を正確に把握していた」と、その歴史的感覚を評価している。<sup>\*5</sup>雪嶺の高島炭坑キャンペーンにもあてはまるものである。

〔註〕

- \*1 「日本の思想家」二、朝日ジャーナル編、志賀重昂 P 22～P 27、朝日新聞社・昭和三八年
- \*2 「ナシヨナリスムの肖像」鹿野政直 P 44（前掲）
- \*3 「マス・メディアと国家の近代化」ルシアン・W・バイ編著 P 136、日本放送出版協会・昭和四二年
- \*4 陸羯南の自由・平等主義の主張は注目される。
- \*5 「戦中と戦後の間」丸山真男 P 281～P 285、みすず書房・一八七六年

## 五、マスコミの戦い

「日本人」は発刊に当って「小利益ニ營々タルガ如キハ、苟モ為ザル処ニシテ發行費用ヲ償フニ足ルヲ限トシ最廉最低ノ定価ヲ以テ世人ニ頒<sup>ツカダ</sup>ントスル者也」とうたい、月二回發行し一部定価六錢五厘とした。米一升三錢のところで、

「日本」の一部一錢五厘に比べれば、高すぎるとはいえない。「日本」は日刊紙だから一カ月三〇錢であつた。

「日本人」の資金は政教社の同志約百人が各五〇圓を拠出したといわれ、雪嶺の大学初任給がそんなところだつた。<sup>\*1</sup>「日本」の後援者は乾坤社一八名の若手官僚、知識人と谷干城が資金援助した。

「日本人」の發行部数は創刊当初五〇〇部、のち三、〇〇〇部とみられ、「日本」は八、五〇〇部であつた。明治二二年二月一四日官報の新聞雜誌月間發行部数表によると、「日本人」は月に二一、二二二で東京府下へ配布一一、一一八、各府県へ配布一〇、〇七四、外国在留邦人へ配布二一、外国人へ配布八となつており、これは先発の「国民の友」(明治二〇年創刊)の二五、九五七と比べて、当時好評の「国民の友」に一年足らずの間に迫るといふ好調ぶりである。東京府統計書による明治二二年の新聞年間發行部数によると、「日本」は年間二、四六四、一〇三、發行回数二八七、一日發行部数八、五八五となっている。日本主義運動は二つのマスメディア、雑誌と日刊紙によって、その影響力を拡大した。

「日本人」はしかし明治二四(一八九二)年筆禍により廃刊し、週刊誌「亜細亜」を身替り雑誌とし、明治二六年「日本人」を復刊、一方「日本」は日清戦争のとき最高潮を記録したが、これまた相次ぐ筆禍のため「大日本」や「小日本」を身代り紙としてつないだ。陸羯南は病に倒れ、明治三九(一九〇六)年銀行家伊藤欽亮に新聞を譲つたが、三宅雪嶺ら社員は新社主の編集方針と合わず、連袂退社した。雪嶺は翌四〇年一月「日本人」を「日本及日本人」と題

し、新聞「日本」の正統を継ぐことを表明した。この秋九月羯南は死去した。

志賀重昂は明治二九（一八九六）年政党人となり政教社を去った。三宅雪嶺も大正一二（一九二三）年大震災後の経営について「誤解」が起こり、政教社を離れた。<sup>\*2</sup>

「日本人」「日本」は声価高く、「日本人」は「国民の友」と競い、「日本及日本人」は大正初期には「中央公論」「太陽」と並ぶ有力な総合雑誌であった。また「日本」は創刊一年余にして日本の指導的新聞として重きをなした。とはいえ、その経営は苦難の道であった。「日本人」は明治三十七年中に延べ六カ月余発行停止を受け、「日本」も創刊から一八年、羯南が病で退くまでの間に、発行停止三〇回、延べ日数二三〇日に及んだ。

発行停止については、「日本人」第二十四号（明治三二・五・七）の巻頭に「発行解停の感」という社告をつぎのように掲載している。

「余輩は法律の悪弊を矯めんことを願へども、法律の支配を免れんことを欲せず、故に新聞雑誌を発行する上は、突然停止を命ぜらるるも怪訝無く、突然禁止を達せらるるも怪訝する無く、突然二年の禁錮に処せらるるも怪訝する無く、突然三百円の罰金を科せらるるも怪訝する無く、一篇の文章にて資産を欠損せられ、一首の詩歌にて自由を制限せらるるは、智者の所為に非ざるべけれども、鬱勃たる精神の向ふ所ろ、復た奈何とも為すべからざるなり、幸にして今回の事、纔に発行停止にて已めり」

明治二〇年代の新聞条例、出版条例によれば、政体を変壊し朝憲を紊乱する罪に対して、二月以上二年以下の輕禁錮に処し、五十円以上三百円以下の罰金を付加することが定められており、こうしたケースが、ごく小さいことからでも起ったことに対する抵抗の文である。

杉江輔人は、しかしこの号に「新聞雑誌の発行停止」という論文をのせ「若し夫れ唯停止するに止まるときは解停



の晩に至り基雜誌の声価は却て倍倍高まり、発表頒布の数も停止前に倍蓰し、雑誌の爲には却て万歳を唱ふるのを奇観を呈すること、従来の経験に照して世人の熟知する処なり」と述べている。発行禁止により人気がかえって集まることは、自由民権新聞の場合も同様であったが、それが半歳も続いてはたまったものではない。雪嶺・重昂の名著は政教社から刊行された政教社のドル箱であったとはいえ、それだけでは経営を支えることはできなかったはずである。

弾圧は反体制ジャーナリズムの宿命であり、日本主義ジャーナリストはこれを甘んじて受けたのである。ジャーナリストとして官僚主義からはみ出し、商業主義に抵抗し、ひたすらに日本の国家としての独立と、個人と国家の自由・平等を目指した日本主義者たちは、たしかに逞しい、新文化の担い手たちであった。

条約改正交渉は井上馨のあとをついだ大隈重信案も潰れた。そして明治二七年（一八九七）青木周蔵外相のとき、日英の間に自主的改正に成功し、諸外国もこれに同調した。不平等条約の改正によって、日本の独立はいちおうは約束された。しかし日本主義者たちの目標とした自立的な独立、個人の自由平等の道はなお遠かった。

#### 〔註〕

\* 1 「三宅雪嶺」長谷川如是閑 p 269、「三代言論人集」第五卷、時事通信社・昭和三八年

\* 2 「日本の名著」三七、p 475、(前掲)

\* 3 「本の百年史」瀬沼茂樹、p 53、出版ニュース社・昭和四〇年

\* 4 青木外相の方針は、外人法官を大審院に任用しない、法典編成発布を予約しない、領事裁判権を撤去しないうちは不動産の所有権を許与しない、外人取扱いは、ある場合には特殊制限を設けるなどであった。イギリスは極東政策の上から改正案に同意した。

## II 井上円了の「護国愛理」

### 一、「日本人」における円了

井上円了は明治青年の二次世代の代表者の一人として、また政教社の同志として、哲学の普及と仏教改良の旗を掲げ、明治二〇年代の啓蒙者としての役割を果たした。ここではまず政教社の雑誌「日本人」における円了の活動を明かにした。

円了は「日本人」発行を祝って、その第一号から「日本宗教論」を執筆し、六回にわたって連載した。その期間は、明治二二年四月から九月までの五カ月に及ぶが、半月刊誌の性質上やむをえないものであろう。<sup>\*1</sup> しかもこの論文は（未完）のままで終っている。それは円了が、この年六月九日横浜を出発し、第一回外遊を試みたからである。欧米を周遊して帰国したのは翌年六月二八日であった。この論文は外遊前に一気にまとめたものとみられ、その内容には外遊から投影されたものはみられない。

「日本宗教論」は、何よりも政教社の日本主義の中における仏教改良論を提示することに力点がおかれた。

「日本宗教論緒言」（日本人第一号）は当時の西欧化の大波の中で、日本人が日本人でなくなり、日本が日本国でなくなることを憂え、日本人の日本人たる精神思想、習慣遺伝を保存しなければ、日本人をして東洋に独立させ、西洋に対抗できないとして、日本人の日本人たる「主元素」は仏教であると説いている。

「抑モ<sup>ソモ</sup>日本人ノ日本人タル所以ノモノ之ヲ分析スルニ種々ノ元素ヨリ成ルヲ見ル、而シテ宗教其一二居ル、當ニ其一

ニ居ルノミナラス其諸成分中ノ主元素ナルヤ疑ヲ容レス、且ツ其所謂宗教ニハ古来儒仏神ノ三教アリテ互ニ相待チ相和シテ日本人ノ日本人タル一大複合体ヲ形成セルニ至ルヤ亦必セリ、然リ而シテ多数ノ人民ヲ薰染シ多数ノ思想ヲ占領シ其影響最モ重且大ナルモノハ独リ仏教ナリトス、故ニ仏教ハ日本人ノ日本人タル主元素中ノ主元素ナリト云ハサルヘカラス、果シテ然ラハ仏教ヲ維持拡張スルハ即チ日本人ヲシテ日本人タラシメ、日本人ヲシテ独立対抗セシムル要法ナリ」<sup>\*2</sup>

と述べ、当時におけるキリスト教の興隆と仏教の衰退に言及し、仏教復興を呼びかけた。

本論（其一）に入るや、円了は政教社の唱える国家の独立と、独立論における宗教の位置づけを論じた。それはすなわち日本主義運動における円了の立場であった。本論の冒頭に「余が日本宗教論ハ全く国家の独立、即ち本誌編輯人志賀君の所謂「国粹保存主義」に本<sup>もと</sup>きたる者にして、決して余が従来<sup>もとつ</sup>の宗教を偏愛するの私心に出てたるに非ず<sup>\*3</sup>」と、執筆の動機を明かにし、直載に独立論の論拠と重要性を述べる。

「今我邦ハ其国内に政党政論の小争なきにあらすと雖も、強国猛敵の四隣を繞<sup>まわ</sup>るありて、動もすれハ我を奪ひ我を吞まんとするの状あり、国外に立ちて之を視れハ其危急稍累卵<sup>すや</sup>の勢あるものの如し、此際に当りてハ我日本人たるもの共同和合して終始全力を国家の独立に尽さるを得ず、豈兄弟相争ふの時ならんや、故に余ハ今日我社会の問題中一国の独立論の如き最重至大の問題なしと断言するなり、人種改良論も男女同權論も富国論も強兵論も、皆此大問題に附屬して起るものに過ぎず、語を換へて之を言へハ、一国の独立ハ第一の目的にして、他の諸論ハ第二の方法なり」<sup>\*4</sup>

この前年、明治二〇（一八八七）年は条約改正反対運動の盛り上りによって、条約改正国際会議は無期延期となり、交渉の主役井上馨外相が辞任したが、政府に対する民権派の抵抗は衰えず、一二月には言論集会の自由、条約改正反

対、地租軽減の三大事件建白となり、全国騒然たるなかに政治危機を感じた政府は、断乎として保安条例を公布し、片岡健吉、中島信行、尾崎行雄ら五七〇名を東京から追放した。新聞紙条例、出版条例も厳しく改正されたが、国内において兄弟（註・民権論者と官権論者）相争う状況はますます激しかった。それよりも何よりも日本の当面の課題は対外問題が最も重大なのだ。一国の独立これである。しかも独立の方法論として西欧化の方向がとられ、「西洋病」が滔々たる世論となっているのである。

「抑近年の輿論ハ日本従来の風を去りて一步進む毎に益々西洋の方向を取り、衣服飲食住居を始めとし容貌裝飾交際礼式歌舞音楽遊戲に至るまで尽く西洋を模倣し、甚はなはだきに至りてハ雑婚論を唱へて日本人の体格血色まで西洋に變せんとし、言語文章も或ハ洋語欧文を用い、宗教道德もすべて耶蘇主義を取らんとするものあり」\*。

こうして西欧化すれば、西洋の文明諸国と同等の地位を占め、同等の交際を開き、西洋の強国猛敵の目を免れようなどとは、とんでもない。西欧諸国の眼力は大いに発達しているから、その手には乗らないであろう。いや、このままだと進めば一国の独立が危い。

「衣食住の如きハ時勢に應じて之を變更するも目前に重大の影響を見すと雖も、言語宗教に至りてハ決して輕易に變更すること能ハず、何者一国の大事の直接に関するものをや、一国の大事とハ何そや、日く独立是れなり、言語ハ思想の表象なり、宗教ハ人心の膠漆なり、思想を表示するものハ言語なり、人心を粘合するものハ宗教なり、宗教變ずれば人心一たひ散し、言語變ずれば思想一たひ移らざるを得ず、故に余將に言ハんとす。

言語宗教を變ずるハ人の精神思想を變ずる者にして、我邦の言語宗教を變ずるは我日本人の日本人たる精神思想を變ずるものなり」\*。

日本人の日本人たる精神思想を保存することが独立につながる大きな力であり、宗教はその主元素であるとした。

「実に宗教の変更ハ一国の安危存亡の関する所にして、国家の大事蓋し此上に出づるものあらざるへし」と「自国従来の宗教を維持」することの大切さを強調したのである。

国粹保存主義と円了の宗教論はここに見事につながっている。

本論（其二）は日本の宗教改良、（其三）は「耶蘇教を以て仏教に代用」できない所以を説き、（其四）に至って宗教復興を叫んでいる。それは失われたる日本の価値の復活としてとらえられる。

「西洋病の行はれたるかために日本従来の名産佳品にして其価値を失ふたるもの幾多あるを知らず、実に国家の為に愛惜すべきことならずや、近頃其失ふたる名産佳品中其真に価値あることを発見したるものは日本の美術なり、是れ日本人の発見に出てたるにあらずして西洋人により発見せられたるものなり、若し西洋人あるにあらずされハ我人皆西洋の美術を称賛して日本の美術を失うに至るへし、今我従来の宗教も其失へたる名産佳品の一種なり、今日の日本人は西洋病の為に其真に我邦の名産なることを知らざるも、一たひ日本思想を起すに至れば必ず其亦無類の名産なることを知るに至るべし」<sup>\*8</sup>

円了はその「仏教活論序論」において、仏教を「世界無比・万世不二の教法」といい、仏教は「日本の特産」であり、「西洋に全くその類なくして日本に存し、またこれを外国に伝えて声価を得べきもの、ひとり仏教あるのみ」<sup>\*9</sup>と仏教の価値の再発見を高らかに述べていることを想起すれば、ここにいう「無類の名産」なる強調を理解することができる。

本文（其五）では、日本の独立に必要なものは国民の精神である。「然るに其精神西洋風一たび行はれて以来日に月に減するを見るのみ……苟も国力の西洋に及ばざる時ある以上は、我文物の交換と共に一国の独立を失んことを恐れざるを得ず」<sup>\*10</sup>と結んでいる。しかし（其五）の中段で、「日本従来の宗教を維持して日本従来の精神を連結する」の論

を「後に至りて述ふへし」<sup>\*11</sup>と保留したままで（未完）と記し、その後「日本宗教論」は打ち切られた。外遊の多忙の間に、これを補完することを断念したものであらう。

とはいえ、この未完の「日本宗教論」は、この一編をもつてして、井上円了の日本主義運動における個性的な位置を明確にしたものである。そして円了の日本主義も、他の政教社同志とともに開明的であつたことを付け加えよう。

「強国猛敵」に備えねばならない、しかし「西洋の事物の便且つ利にして我邦に用ひざるを得ざるものハ成るべく一たび之を日本風に化して用いるか、然らされハ日本従来の者をして改良して西洋品に代用することを務めんことは余か切に望む所なり」<sup>\*12</sup>と、西洋事物の利をいちおう認めたいうえで、ここでも改良論を唱えているのである。

〔註〕

\*1 「日本宗教論」の連載Ⅱ緒言（第一号・明治二一・四・三）其一（第四号・明治二一・五・一八）其二（第六号・明治二一・六・一八）其三（第七号・明治二一・七・三）其四（第八号・明治二一・七・一八）其五（第十二号・明治二一・九・一八）、日本人第九号は高島炭坑緊急特集にあてられており、其五の掲載がずれたものとみられる。

\*2 「日本人」第一号 p 8

\*3 「日本人」第四号 p 11

\*4 「日本人」同 p 12

\*5 「日本人」同 p 13

\*6 「日本人」同 p 13 } p 14

\*7 E・F・フェノロサ（一八五三～一九〇八）は明治一一（一八七八）年来日、日本美術の研究・批評により、明治初期の

美術界に大きな足跡をのこした。とくに狩野・土佐派の日本画を推賞し、日本画復興のきっかけをつくった。岡倉寛三（天心）

三宅雄二郎、狩野芳崖、橋本雅邦はその弟子であつた。明治二三年帰国、同二九年再来日した。

\* 8 「日本人」第八号 p 17

\* 9 「仏教」現代日本思想大系七「仏教活論序論」p 80 ~ p 81、筑摩書房・一九六五刊

\* 10 「日本人」第十二号 p 10

\* 11 「日本人」同、p 9

\* 12 「日本人」第八号 p 16

## 二、哲学館から「日本主義の大学」へ

井上円了はすでに明治治二〇年に「仏教活論序論」を著し、少壮学究として、仏教改良の日本主義哲学者として、大きな反響を呼び、同年哲学館を開設して、これを行動に移した。

「三十にして起つ」との明治時代一般の格言のとおり、円了は三〇歳にして、行動したのである。翌二一年政教社の創設に当たっても、有力な同人として参加した。今回の外遊もかねての行動計画として、止むに止まれぬものであったであろう。政教社の人々——杉浦重剛はもとより島地黙雷、志賀重昂らは、海外における体験とその文化の摂取・批判に裏付けられた日本主義者であった。仏教復興に挺身する円了にとって、未知である欧米の宗教の実態と宗教研究の現状を知ることが、「仏教活論序論」からさらに前進するためには必要であり、その理論武装となる比較研究に一年余の海外研究が当てられたことは、うなづけるものがある。

海外の宗教事情という、未知の世界に円了は挑戦した。そして大きな収穫をえて帰ってきた。明治二二年六月のことである。

「日本人」第二八号（明治三二・七・三）は雑報欄に円了の帰国をつぎのように伝えている。

「社員井上田了氏は、曩きに欧米に渡航し漫遊週年を経て、去月二八日無恙帰朝せり、其週遊中には種々耳目に感觸する所あり、多少有益の材料を齎して帰りたりとの事なれば、追々本紙上に其意見を著はす事ならん、読者之を諒せよ」<sup>\*1</sup>

外遊の收穫として、井上田了の意見を著した主論文は「日本人」第三〇号から三三号まで連載された「生ら将来の目的事業に就て一言を述へ以て知友同志に告ぐ」であつた。今回は号を追つて休むことなく完結した。帰朝後一カ月、想を十分に練つてまとめたものであらう。

田了はの中で「仏教活論序論」の延長線上に欧米各国における国家と宗教の密接な關係を調査し、宗教と国体との不可分の現実を分析し、「宗教の独立ハ一国の独立に關係し、宗教の変動ハ一国の変動に關係する」<sup>\*3</sup>と仮説した。また學術の分野において「西洋各国皆其国固有の學問を愛重し、芸術を保護し、別して言語宗教の如きは、務めて其国固有のものを保存せんとす」<sup>\*4</sup>という現実を知り、一国の独立からみれば言語、宗教、歴史を保護愛重することが最も必要であるにかかわらず、日本では「世間之を保護する方法を設けず、之を講究する學校を置かざるは、實に今日の一大欠典」といわざるをえないとし、日本従來の學の各部門の専門校のほかに「之を兼學する専門大學」<sup>\*5</sup>を設けることが必要であるという結論に達した。

この結論が井上田了の將來の目的となつたことによつて、田了の事業は決定的な轉換をもたらされた。すなわち哲學館を改良して、日本主義の大學とする決意と希望であつた。

外遊によつて田了のこれからの人生、主たる事業は哲學館大學の創立と發展に方向づけられたのであつた。

さて、もとへもどつて、宗教と學問に關する田了の外遊における收穫をこの結論の理由づけとして、もう少し詳しく拾ひあげてみたい。



田了の欧米体験の最初の驚きは、各国の耶蘇教が「近年大いに勢力を失ひ、信徒日に減し……衰微甚しき」に反して「仏教ハ近年之を研究するもの及び之を奉信するもの各地に起り、米国にも、英国にも、仏国にも、皆有志者ありて教社を組織し、教会を設立し、以て其布教に尽力」していることであつた。また「英・米・仏・独・和・魯（註・ロシア）等の諸国は皆仏教学者ありて仏理を講究し、其著書続々世に出つ」として、ベルリンでは欧米学者の仏教研究の書籍が六二部あつたと報告している。<sup>\*6</sup>これらの書はいずれも大抵は仏教を称賛していた。欧米の仏教については自然の勢いに任せてもよいと田了は予言する。そして、ただ国家の独立は自然の勢いに任せられない、ということ。「欧米各国を巡視して深く感情を動かせし所なり」という。

「各国人民皆独立の精神を有し、独立の氣風に富む……（ところが）顧みて我邦の事情を考ふれハ、日本從來の独立の學問も、事業も、組織も、目的も、風習も、礼式も、皆な已に其独立を失ひ、今や西洋の事事物物次第に民間に行はれて人其事物の変化と共に最も貴重なる独立の精神其物を併せて失はんとす……故に我人今日の急務は此の貴重な独立の精神を養成し、<sup>ナショナルチ</sup>國粹主義を維持するにあり」<sup>\*7</sup>

と、日本主義を再確認した。

では、独立思想を養成するにはどうすればよいか、と田了は考えた。

「余は以て之を視るに、日本固有の言語、歴史、宗教。其他日本固有の風俗習慣を維持改良するより外なし」。<sup>\*8</sup>

田了のみたところ、西洋各国はそれぞれの固有の學問を愛重し、芸術を保護し、特に言語、宗教の如きは、つとめて、その国固有のものを保持しようとしている。国際交流が活発で、優勝劣敗の競争の激しい今日では、日本の學問、技芸、法律、兵制などを外国に學び、それを採用せざるをえない事情がある。それは外国が進歩しているので止むをえない。だが――

「最も密接に一国の独立に関する、言語、宗教、歴史に至りては、彼れ独り長する所にあらず。亦競争上彼れを学ふは、我に於て最も不利不幸なるものなり。況んや我邦には、毫も彼れに其価値を譲らざる言語あり、宗教あり、歴史あるに於ておや。此三者を保護愛重するは、独り一箇の利益にあらず。一国の独立上最も急要なるものなり。」<sup>\*9</sup>

言語と歴史の大切さは世間もすでに知っているが、宗教については知られていない。として、円了は宗教の、その間における必要性について、つぎの点をあげる。

第一に宗教は、他の百般の事物が変化する中で、一種不変の精神を保持する性質があること、第二に宗教によって「衆人互に相一致し互に相結合するの傾向」<sup>\*10</sup>があること、第三に宗教は貧富貴賤を論ぜず、賢愚利鈍の別なく、その理を解し、その樂を受ける。特に「宗教の益ハ愚民下等社会の中心に入りて、其精神を支配するにあり。故に宗教にあらざれば下等の人心を維持すること難し」<sup>\*11</sup>第四に宗教と人の精神とは密切に関係するので、その思想は社会百般の礼節、風俗、人情を構造する。

円了はこのように、宗教の社会における機能と役割について述べ、今日、日本固有の宗教を保護することは「一は千万各別の人心を結合するに便利あり。一は一国独立の思想を維持するに必要なものなり」<sup>\*12</sup>と仏教復興を説くのである。

すなわち西洋各国をみるに、各国の宗教は同じ耶蘇教といつても、別派別流の耶蘇教であつて、それぞれ独立の組織をもっている。それは一国の独立上必要な事情があるからである。しかるに日本では外国の宗教が続々入ってきており、従来あつた宗教は不振である。そもそも耶蘇教は教義といい、儀式といい、組織といい、みな「外国にあるものの写真模形」であつて、外国の宣教師を戴き、外国の扶助金を仰いでいる、出張所であり支局である。「外国の宗教即ち敵国の宗教の支局分会は、大に我人心を散せしむるの害あるを信ぜざるへからず」<sup>\*13</sup>と、円了はきわめてきびし

くキリスト教に相對するのである。この認識は西欧を周遊して、諸外国の強大さをその目でみ、その宗教界の実状を調べたうえでの実感でもあった。「耶蘇教は強国の宗教にして、其強国ハ皆我カ敵国なることを忘るへからず<sup>\*14</sup>」と、現状を傍観する世の論者に警告した。

円了は当時日本に入つた耶蘇宗教の一つ一つをあげて、それらが国教または公認教として政府から多大の援助を受けていることを指摘し、とくに米国教会を注目した。

「今米国の宗教を我国に入るゝハ、自由、共和、同権、平等の思想を我国に入るゝものにして、之と同時に、我国従来の風俗、習慣、人情、礼式を破り、我邦従来の国是、政体を害し。君民、上下、貴賤、内外の人をして、自由、共和、同権、平等の地位に立たしめざるへからず<sup>\*15</sup>」

かくて宗教の影響は国体に及ぶとする、だから日本従来の宗教を維持することが、国家のために急要であるということになる。このように論ずるのは「憂慮に過ぐ<sup>\*16</sup>」と必ず評されるだろうが、「余輩固より其憂慮に過ぐるを知る<sup>\*16</sup>」兵力金力、知識学問、教育文明いづれも外国がすぐれている今日の事情から考えて憂慮せざるをえないのであると、円了は固く自説を強調する。

円了にとって一国の独立が何にもまして最大の命題であつたからである。こうした思索の中で、円了は「将来の目的事業に就て」をつぎのように結んだ。哲学館を改良して日本主義の大学を開こうと。

「今余カ哲学館の上に改良を行はんとするの意ハ、其目的とする所日本主義を取りて、我国粹を保存するに最も必要なる機関とも云ふべき、我邦の言語歴史宗教の三科を研学し、神儒仏各部の学を兼脩し、傍ら之れと關係を有する西洋の諸学を参考し、次第に進て他日日本大学の組織を開かんことを望むものなり<sup>\*17</sup>」

〔註〕

\* 1 「日本人」第二十八号 p 23

\* 2 「日本人」第三十号（明治二二・八・三）同三十一号（明治二二・八・一八）同三十二号（明治二二・九・三）同三十三号

（明治二二・一〇・二七）。第三十二号から三十三号までの発行の間に「日本人」は九月五日、一〇月一九日に発行停止処分を受けていることが、三十三号の雑報欄に報道されている。その理由は治安妨害であった。

\* 3 「日本人」第三十一号、p 13

\* 4 同第三十一号 p 11 ~ p 12

\* 5 同第三十三号 p 16

\* 6 同第三十号 p 7

\* 7 同第三十号 p 7

\* 8 同第三十一号 p 11

\* 9 同第三十一号 p 12

\* 10 同第三十一号 p 13

\* 11 同第三十一号 p 13

\* 12 同第三十一号 p 14

\* 13 同第三十一号 p 15

\* 14 同第三十一号 p 15

\* 15 同第三十二号 p 12

\* 16 同第三十三号 p 16

\* 17 同第三十三号 p 16 ~ p 17

### 三、「護国愛理」の狼火

井上円了は明治一〇（一八七七）年、東本願寺留學生として上京を命ぜられ、同一一年東京大学予備門（のち旧制第一高等学校）に入り、同一八年に東京大学の哲学科を卒業した。東本願寺からは当然、帰洛を要請したにかかわらず、どういう約束になっていたのか、円了はこれを断わって東京に止まって、仏門に帰らず、哲学徒として宗教復興に当たる道を選んだ。本願寺との約束がどのようなものであったか、八年余にわたる恩恵をどう処理したかは明かでないが、円了の宗教改良論が、危機にある仏教界へのよい刺激として説得力をもったのかも知れない。あるいは円了個人の能力だけではなく、本願寺は明治一〇年代の仏教界で大内青巒や島地黙雷らの啓蒙活動によって、起こされていた新しい気流に期待したのかも知れない。ともあれ、円了は東京にとどまって著作に専念し、明治二〇年「仏教活論序論」を著すとともに、一方では九月に「哲学館」を開設した。

哲学館を開設した目的について、円了はつぎのように述べている。

「生は……明治二〇年夏発起して世の晩学にして速成を求むる者、貧困にして大学に入るの資力なき者、洋語に通せずして原書を解せざる者等に哲学諸科を教授する為め、論理学、心理学、審美学、社会学、宗教学、教育学、政理学、法理学、純正哲学、日本哲学、支那哲学、印度哲学、及び是等と直接の関係を有する諸科を研修する私立学校を創設せり、之を哲学館と称す<sup>\*2</sup>」

哲学館はその名の通り、哲学を教える塾として発足したのである。しかも晩学者、貧困者、外国語力のない人達という設定である。学ぼうという意志はあっても、落ちこぼれていた人達に哲学を学ぶ道を開こうとした。円了の貧しい少年時代からの、ひたむきな勉学の苦難が、この発想に投影されているとみていいであろう。しかし、この盛沢山

な学科を、どう維持したのであろうか。

哲学館は加藤弘之、勝安房が援助し、加賀秀一、辰巳小次郎、三宅雄二郎、棚橋一郎、内田周平らが、教授その他に協力したといわれる。加賀、辰巳、三宅、棚橋の名はすでに「日本人」の同志として、さきにわれわれにも親しい顔触れである。これらの協力者の多くは、また、円了が東大在学中に参加した「哲学会」の僚友でもあった。

石黒忠恵の回想によれば、円了が東大を卒業したとき、石黒は文相森有礼を通じて、円了を文部省に採用すること奨めたが、円了は辞退し、その理由として「宗教的教育事業をやりたい」ともらしていたという。<sup>\*3</sup> 本願寺へことわった理由も、具体的にはこのあたりにあったであらう。

哲学館は先輩、僚友の援助と協力によって開設された「宗教的教育事業」であった。「仏教活論序論」の緒言に「それ、余は、赤貧多病、もとより権勢の途に奔走して栄利を争うの念なく、毀誉の間に出没して功名をむさぼるの情なく、ただ終身陋巷に潜んで真理を楽しみ、草茅に坐して国家を思うの赤心を有するのみ。……もし人、この論を一読して、幸に余が微志の存する所を知り、共にその力を尽くして、仏日のまさに落ちんとするを支えんと欲するものあらば、請う余にその意を告げられんことを。余の喜び、果してい<sup>\*4</sup>かんぞや」

こうして同感同士の士の援助協力があつて哲学館は開かれた。哲学館は入学者が一時は二百余名を数えた。予想以上の盛況であつた。創立の翌年一月には哲学館講義録を発行した。館外員として購読者を募集し、千五百名を越えた。「館内館外面員を合せて千七百乃至千八百名の生徒ありて。其後生か欧米周遊の途に就きてより以来、盛衰の小さなきにあらざると雖も、諸学士博士の尽力によりて本館の勢は依然として今日に持続することを得たり」<sup>\*5</sup>

これが円了が帰国したときの状況であつた。円了は哲学館を改良して「日本主義の大学」とすることを決意したことは、さきに述べた。「日本人」第三十一号（明治三二・八・一八）の雑報欄は、井上円了の「哲学館将来ノ目的ニツイ

テノ意見」を掲載し、「日本主義の大学」というみだしをつけて、これを報道している。

「曩に哲学館を起して大学に入る能ハざる者の為便宜を与ヘ……欧米各国を漫遊して去頃帰朝されし井上円了氏は、其巡遊中に親く各国の風儀を察するに、何れも自国固有の学問を基礎として交ふるに他国の学文を以てするの風あるを見、我国にても我国固有の学問を基礎として、大学を起すの必要あるを感じ、これに基く所の大学を起さんとの目的を以て、彼の哲学館を拡張するの意見書を知友に領ちたり」<sup>＊</sup>

報道は哲学館が新築にとりかかり、教師は学士数十名であると付け加えている。円了署名の「哲学館将来ノ目的ニツイテノ意見」がこれに続いて全文を掲載されている。いささか繰り返しとなるが、円了の思考のまとめとして、その一部を抜粋する。

「余欧米各国ヲ巡遊シテ、且ツ感シ且ツ驚キシモノアリ、即チ各国ノ大学ハ勿論、中学小学ニ至ル迄、皆其国固有ノ学ヲ以テ基本トシ、交ユルニ他邦ノ学ノ之レト關係ヲ有スルモノヲ以テス、其国ノ学ヲ保護シ愛重スルコト此ノ如シ、蓋シ其国固有ノ学ハ、一国ノ独立ヲ助クルニ必要ナル元素ヲ有スルモノニシテ、之ヲ愛護スルハ、一国独立ノ思想ヲ人心中ニ維持スルニ必要ナルニヨル、然ルニ顧テ我邦ヲ視レハ、未タ日本固有ノ学ヲ基本トシテ立テタル大学アラス、又之ヲ愛護スルノ必要ヲ説クモノアラサルカ如シ、而シテ我邦ニハ我邦固有ノ学問アリ、史学、文学、宗教学等はレナリ、之ヲ愛護シ之ヲ専攻スルノ方法ヲ設クルハ、日本従来ノ学問ヲ振起スルニ必要ナルノミナラズ、日本ノ人心ヲ維持シ、独立ヲ保存スルニ必要ナリ、是ニ於テ日本主義ノ大学ヲ設立スルノ必要起ル、其大学ハ日本固有ノ学問ヲ基本トシテ、之ヲ輔翼スルニ西洋ノ諸学ヲ以テシ、其目的トスル所ハ、日本国ノ独立、日本学ノ独立ヲ期セサルヘカラス、此ノ如キ大学ニシテ、始メテ真ノ日本大学ト謂フヘシ」<sup>＊</sup>

なおこの意見書はこういう大学は一朝一夕には完成できるものではなく、数年かかろうといい、西洋・東洋の二部

に学科を分ける考えを明かにしている。東洋部が日本固有の学（神儒仏三道及び我邦固有の哲学、史学、文学）を教えるものである。

「日本人」の同じ号に、哲学館新築広告と館員募集広告がのっている。それによると新築は暑中休暇中に落成し、九月から使用とあるが、これは九月一〇日の暴風雨で倒壊し、竣工したのは一〇月末であった。館員募集は寄宿舎の新築を知らせている。一年級百五十名、二年級五十名、三年級五十名と計二百五十名を募り、希望者は無試験入学できるといっておおらかさ。月謝は八十錢、館費十錢、寄宿およそ二円、束脩（註・入門のとき先生に持参する礼の贈り物の意）一円五十錢であった。米一升が五錢、もりかけ一錢、ラムネ三錢という時代であった。<sup>\*8</sup>東京府下の最下等の下宿料が一カ月三円五十錢だったのが、米価の値上がりで、この年九月に四円に値上りしたという。（明治二二・九・一七朝野新聞）<sup>\*9</sup>これからみて、学費は比較的安いものであった。

「日本人」第三十五号（明治二二・一一・一八）に再び私立哲学館の大きな一ページ広告が掲載された。それには寄宿およそ二円とあつたのが、「寄宿生ハ食費二円舎費二十錢以上」とされているが、ほかの学費はそのままである。また館外員には千人を募集し、束脩金五十錢、月謝は改正減額二十八錢としている。学科も講師陣も、大学にふさわしく充実した。<sup>\*10</sup>

私立哲学館はかくして「日本主義の大学」を目的として、一月からその第一歩を踏み出したのである。いつからのことかわからないが、哲学館の制帽は上から総（ふさ）の垂れた角帽<sup>かくぼう</sup>であったという。<sup>\*11</sup>

勉学の機に恵まれなかった青少年のための塾として出発した哲学館が、いまやその構想を拡張して「日本主義」の大学を目指すに至ったのであるが、円了の教育事業の根底にあった理念は変わらなかった。それは「仏教活論序論」を貫く「護国愛理」であった。哲学館はこの理念を事業に移したものであり、哲学館の改良―日本主義の大学への移



行はその当然の発展であつた。

従つて、この小論は井上円了の「護国愛理」の理念を明かし、その同時代における意義を確定して、小論の結びとする。

「護国愛理」は序論の冒頭に声高らかに謳われている。

「人誰レカ生レテ国家ヲ思ハザルモノアランヤ、人誰レカ学シテ真理ヲ愛セザルモノアランヤ、余ヤ鄙賤ニ生レ草莽ニ長ジ、加フルニ菲才浅学ナルモ亦敢テ護国愛理ノ一端ヲ有セザルモノニアラズ……」

抑<sup>ソモモ</sup>真理ヲ愛スルハ学者ノ務ムル所ニシテ国家ヲ護スルハ国民ノ任ズル所ナリ、国民ニシテ国家ヲ護セザルモノハ国家ノ罪人ナリ、学者ニシテ真理ヲ愛セザルモノハ真理ノ罪人ナリ。国家学ナキハ其進歩ヲ見ル能ハズ。学者国ナキトキハ其生存ヲ保ツ能ハズ。学者ニシテ国ヲ護スル事ヲ知ラズ国民ニシテ真理ヲ愛スル事ヲ知ラザルモノモ是レ亦罪人ナリ。退テ真理ノ罪人トナリテ進デ国家ノ罪人トナル、是レ豈ニ人ノ目的トスル所ナランヤ。故ニ人苟<sup>イヤシテ</sup>モ罪人タラザラント欲セバ一臂ヲ奮フテ国家ノ為メニ其ノ力ヲツクシテ一志ヲ立テ、真理ノ為メニ其ノ心ヲ竭<sup>ツク</sup>シテ一毛ノ国家ヲ利スルアルモ必ズコレヲ求メ、一髪ノ真理ヲ妨グルアルモ必ズ之ヲ除カザルベカラズ。此ノ如キ人ニシテ始めテ真正ノ護国者ニシテ純全ノ愛理者ト謂<sup>イ</sup>フベキナリ<sup>\*12</sup>」

鄙賤も草莽も学者も国民も、国を思い国の独立を守ることと、学んで真理を愛し国の進歩を期することは、心は同じであらうとするのである。しかし護国と愛理とはおのずから分かれる。その関連について、円了はつぎのように説く。

「今若シ護国愛理ノ二大事ニツイテ其輕重ヲ較スルトキハ、其間必ズシモ差等ナキニアラズ。護国ノ重クニシテ愛理ノ輕キコトアリ、愛理重クシテ護国ノ輕キ事アリ。今夫<sup>ソ</sup>レ真理ハ万世ニ亘リテ變ズル事ナク、宇宙ヲ極メテ尽クル

事ナク、國家廢頽シ人類滅亡スルモ其理依然トシテ存シ、日月星辰ノ高キ、山嶽河海ノ大ナル、鳥獸草木ノ多キ、皆其中ニ同体ノ真理ヲ胚胎スルアリテ、一点ノ雲モ一毛ノ塵モ一トシテ真理ヲ具セザルハナシ。是ニ由リテ之ヲ較スルニ國家ハ真理中ノ一小部分ヲ占有スルモノニ過ギズ、恰モ大河ノ僻隅ニ一粒ノ孤島ヲ現ズルガ如シ。果シテ然ラバ愛理ハ其任重ク護國ハ其責輕シト云ハザルベカラズ。然レドモ國家若シ成立セズ、人類若シ現存セザレバ真理独リ存スルモ誰レカ能ク之ヲ知り之ヲ講ゼンヤ。蓋シ之ヲ講ズレバ智者學者ヲ待ザルベカラズ。智者學者ヲ生ズルハ國家ノ獨立生存ヲ要スルナリ。故ニ學者苟モ真理ノ講ズベキヲ知ラバ、必ズ先ヅ國家ノ獨立ニ向フテ祈ラザルベカラズ。是ヲ以テ護國ノ任ハ愛理ノ責ニ一步モ其輕重ヲ讓ラザルヲ知り、併セテ學者ノ務ムル所、護國愛理ノ二大事ヲ兼行スルニアルヲ知ルベシ」<sup>\*13</sup>

円了においては、天体や生物が簡単に登場するが、ダーウィンの進化論やH・スペンサーの綜合哲学体系などを新鮮に受けとめた円了にとっては自然のことであつたかも知れない。このあたりは、原子爆弾と世界人類と、さらに國家と學者の立場を連想させるものがあるが、國と學問との關係は當時はもっと素朴であつたようである。護國と愛理の輕重を比較して、國家は真理界の一小部分であるとしながらも、真理を講ずる學者は國家の獨立を前提とせざるをえないとするのである。

「余ハ所謂愛理ヲ先ニシテ護國ヲ後ニスルモノナリ、然レドモ其真理ヲ愛スルノ本心ハ護國ノ一念ニ外ナラザルヲ以テ、余ガ真理ヲ喋々スルモノ皆護國ノ精神ノ溢レテ外ニ流ルモノミ」<sup>\*14</sup>

ともいつている。池田英俊の研究によると、「維新仏教には円了にみられるような仏教と哲学の觀點に立つ護國と護法、すなわち愛理の面からの学術的な考察を期待することはできなかった。そこで円了は従来の仏法が、仏法國益の立場から世俗の權力に追従するところに護國の意味を見出し出していたのに対して「護國愛理」における護國が、愛理

すなわち西洋哲学における愛知に基礎づけられたものでなければならぬと主張したのである」<sup>\*15</sup>という。またさらに「円了は当時の時代思想で重視されていた国家・教育・護国の課題を、護法即護国というような（明治）十年代の仏法利益観と対比しつつ、さらに進んで真理・宗教・愛理との関係において捉えなおし、近代国家にふさわしい国民の教育、真理に合致した宗教観および護国愛理の主義を、のちに『日本教育宗教関係論』で体系的にまとめ、教育宗教を振興すればそれと同時に護国愛理の二大義務を完成するを得べしとの見解を示している」と指摘している。<sup>\*16</sup>

円了の護国愛理のいささか不分明な軽重論は国家と真理、護国と愛理の先後の選択ではなく、国家・教育・護国と真理・宗教・愛理との相互関係において、不可分に結びつけられていたことを知るのである。「序論」の軽重論の書かれたときには、その文脈に宗教はあったが教育はまだなかった。その後哲学館を創設し、日本主義の大学へ発展させるという護国愛理の実践の中で、教育という要素が円了の思考の中に固まり「教育宗教関係論」となったとみられる。

もともと、円了にとっては哲学と宗教とがその出発点であった。これに時代精神としてのナショナルイズムが分かち難くからんで、円了の思想は形成されたのである。護国は維新政府の欧化主義への抵抗であり、日本人の主体性を回復し、あらゆる価値の自立的選択を促す、その一方では廃仏毀釈によって衰微した仏教を再興することが、ともに相まって、一国の独立を守るものとされた。愛理は東洋哲学の提唱であり、真理においては日本の宗教がキリスト教に優ると考え、<sup>\*17</sup>とくに仏教の国民への影響力を重視し、日本固有の学を興すべく、教育事業に志したが、これを私学に求めたのはナショナルリストたちの在野精神を共有するものであった。

〔註〕

\*1 大内青麿（一八四五～一九一八）政教分離、自由信教・自由布教を主張し、在俗者中心の仏教を提唱した。

\* 2 「日本人」第三十号（明治二二・八・三）「生か将来の目的事業に就て一言を述へ以て知友同志に告ぐ」p 6

\* 3 「井上円了先生」p 86、東洋大学編

\* 4 「仏教活論序論」p 72、p 73「仏教」現代日本思想大系七、筑摩書房・一九七三刊

\* 5 「日本人」第三十号「生か将来の目的事業に就て一言を述へ以て知友同志に告ぐ」p 7

\* 6 「日本人」同p 27

\* 7 「日本人」第三十一号（明治二二・八・一八）p 27

\* 8 「物価の百年」大門一樹、p 65、p 66、早川書房・一九六八年刊

\* 9 「明治大正昭和世相史」加藤秀俊ほかp 108、社会思想社・昭和四二年刊

\* 10 「日本人」第三十五号 p 3、なおこの広告は学科・講師をつぎのように明かにしている。（うろは順）

理論的宗教学、実際の宗教学、純正哲学、応用心理学

経済学

高等心理学

支那哲学及文学

社会学

法理学及政理学

倫理学史及批評

政治学及社会学

印度哲学及宗教学

審美学及支那哲学

文学士 井上 円了

文学士 濱田健二郎

文学士 岡田 良平

岡本 監輔

文学博士 加藤 弘之

法学士 加藤礼二郎

文学士 棚橋 一郎

文学士 辰巳小次郎

村上 専精

内田 周平

日本神学及史学

教育学

普通心理学

普通論理学

高等論理学

希臘及近世哲学史

史学

博物学

日本文学

人類学及博言学（註言語学のこと）

日本学

印度哲学

支那哲学（易学）

支那哲学

日本学

日本学

植物学

支那哲学

印度哲学

松本 愛重

文学士 国府寺新作

文学士 沢柳政太郎

文学士 坂倉銀之助

清野 勉

文学士 三宅雄二郎

文学士 下山寛一郎

工学士 森山 益夫

関根 正直

鈴木券太郎

萩野 由之

吉谷 覚寿

高島嘉右衛門

内藤 耻叟

文学博士 黒川 真頼

文学博士 小中村清矩

理学士 斎田功太郎

文学博士 島田 重礼

釈 雲照

物理学

理学士 平山 順

地質学

理学士 鈴木 敏

(註・萩野由之以下が臨時講師とされている)

\* 11 「井上円了先生」渡辺泗水の回想 p 167、東洋大学編。正式に私立哲学館大学と改称されたのは明治三十七年であるから、角帽はそのころのことでもあろうか。

\* 12 「仏教活動序論」 p 73 ~ p 74、「仏教」現代日本思想全集七、筑摩書房

\* 13 同上 p 74、文中「講する」は意味の不明なものを解釈する意である。

\* 14 同上 p 75

\* 15 「明治の新仏教運動」池田英俊 p 236 ~ p 237、日本宗教史研究叢書、吉川弘文館・昭和五十一年

\* 16 同上 p 237、井上円了「教育宗教関係論」p 29、哲学書院(明治二六・四)には次の図式が示されている。



\* 17 「仏教活動序論」 p 90 ~ p 91 「仏教」現代日本思想大系七、筑摩書房。円了はここでキリストが天帝の子で神であること、創世、洪水、昇天の説などを「妄説中の妄説」とし、キリスト教の非真理を排斥すると述べている。

### III ま と め

井上円了は明治二〇年代のすぐれたナシヨナリストであった。円了の初期の著作は哲学の啓蒙・普及に大きな共感を呼び、仏教復興の火を点じた。円了は政教社の同志として、国粋主義・国民主義・日本主義運動に参加し「日本

人」に拠って、護国愛理を提唱した。その理念の実践として私学哲学館を創立し、日本主義の大学の実現を図った。これらの点における円了の活動は高く評価されている。しかし、この小論ではなお検討すべき多くの問題を残した。その一つは、井上円了の「日本人」における執筆活動が明治二四（一八九二）年で終わっていることである。この年第一次「日本人」は筆禍により廢刊に追いこまれ、身代りとして週刊誌「亜細亜」を発行、明治二六年ようやく第二次「日本人」を復刊するのであるが、円了の論文掲載は「亜細亜」第十五号（明治二四・一〇・五）以後は見当たらない。これにはどういう事情があったかということである。円了は第一次「日本人」において明治二十一年には「宗教論」、同二二年には「将来の目的事業」を寄稿したのが主なるもので、明治二十三年にはこれといってまとまった論文を書いていない。同年一〇月に「仏教と日本国」があるが、それから一年寄稿せず、二十四年の一〇月の「亜細亜」に寄せた「埋葬論について一言す」が最後のものとなった。明治二十四年は円了が妖怪研究会を設立しており、明治二十七年に「日本仏教哲学系統論」を書きあげ、これが円了の学位論文となった主著とされているところから、かなり多忙ではあったとみられる。しかし政教社との関係はどうなったのか、という点である。

その二つは、当時の日本主義が開明的ナショナリズムであったが、三宅雪嶺、志賀重昂、陸羯南とくらべて、井上円了の場合はより保守的であることである。前三者には明治一〇年代の遺産として、自由・平等・博愛の思想が明確である。雪嶺は「護国と博愛と爰ぞ撞着すること有らん」と開かれた愛国主義を説き、また重昂とともに高島炭鉱の抗夫虐待に立ち上がった。雪嶺が大正デモクラシーの一翼をになったことも、これを証している。羯南は「大日本帝国憲法で、日本人が『臣民』と規定されていたのをよそに、あえて『国民』の名に固執した」これは「日本」第一号の論説に明かであるが、その姿勢は「雑誌日本人もかわらなかった」\*<sub>2</sub>。羯南は「自由主義如何」という小論に「自由主義は個人の自由を伸張するにあり、国家權威の区域をなるべく減縮するにあり」\*<sub>4</sub>と主張している。三者の開明的な透

明度は明るい。

これに反して、円了は外国の強大な国力を恐れるあまりに「現今我邦にある耶蘇教は、皆外国より入るものなり、単に外国より入るのみならず、強大な敵国より入るものなり……外国の宗教即ち敵国の宗教の支局分会は……」<sup>\*4</sup>と、外国に学ぶ必要を一方で認めながらも、「博愛」とは程遠い態度を時に示した。また「宗教の益ハ愚民下等社会の心中に入りて、其精神を支配するにあり」「仏教の護持改良の方法は余あえて当時の僧侶と共に謀るの意なし。なんとすれば、当時の僧侶は大抵無学・無識・無氣・無力にして、たといこれと共に謀るも、その志を遂ぐるに能わざるは必然なり」とあるように、仏教が愚俗と愚僧の手にあることを、しばしば述べた。そこには羯南の自由・平等の国民はいない。宗教論と政治論との差はあっても、円了と他の三者の思想には本質的に異なる面がみられ、円了の開明的な透明度はかぎりをみせるのである。この点はさらに研究の必要があり、円了研究の重要な一つのポイントとならう。<sup>\*7</sup>

その三は明治二〇年代のナシヨナリズムが、日清戦争の国民的試練を受けて、どのように変わっていったか。日清戦争勝利を契機に明治三〇年代のナシヨナリズムは、質的に性格を変えたといわれる。丸山真男はこの点について、次のように述べる。

「明治三十年代に高山樗牛とか木村鷹太郎などによって日本主義が唱えられるのでありますが、この日本主義においては、前に羯南等の唱えた日本主義というものと本質的に性格が異りまして、最早下からの要請というものは全くといってよいほど消え失せて、逆に上からの国家主義が露骨に前面に出ている。例えば天皇を絶対主権者として神格化したり、思想・言論・大学の自由という様なものは頭から否定したり、それから植民地台湾に対する徹底した帝国主義的政策を唱道したりしている。一般に前代の日本主義にあったような弱者に対する同情、ことに労働者に対する



同情が全く消え失せて、国内的にも国際的にも弱肉強食、優勝劣敗、つまり一種のダーヴィニズムというものが赤裸々に説かれているというような点で、まさに二十年代の日本主義というものと質的に性格を違えているのであります」<sup>\*8</sup>

この考察は鋭い。この変化の最も顕著なものは、徳富蘇峰の「平民主義」<sup>\*9</sup>からの変節であった。蘇峰の平民主義は政教社の日本主義と並行した時代思潮であった。遼東還付を契機として、蘇峰は「大日本膨脹論」に一転、軍備拡張、対露復讐の鬼となり、平民主義を支持した人々の失望を買った。こういう情況の下で、「二十年代の日本主義陣営から右翼的反動と自由主義と社会主義の三方向が育っていった」<sup>\*10</sup>という。政教社の人々がどの道を選んだか。第一次「日本人」の弾圧による廃刊から立ち直って明治二六（一八九三）年第二次「日本人」を復刊し、大正三（一九一九）年には羯南の「日本」の坐折に当たって、その正統を継ぎ、「日本人」が「日本及日本人」と改題した事実は、政教社の日本主義の強靱さを示しているが、日清・日露戦争という日本国民への二大インパクトを、政教社の人々はどうか処したであろうか。

日清戦争後において、日本の国民意識は「国民という一つの集団意識が初めて近代的ナショナリズムと呼ぶにふさわしいものに成長していったことに気付く」<sup>\*11</sup>とはいうものの、「同時にこの頃から、近代的な個人主義と異った、非政治的な個人主義、政治的なものから逃避する、或は国家的なものから逃避する個人主義思潮が、つまり政治的な自由主義でなく、むしろ「頽廃」を内に臆した様な個人主義が日清戦争以後急速に蔓延してきた」<sup>\*12</sup>という丸山真男の考察は注目される。井上円了の明治三〇年代の思想と行動を、いわば略譜的にたどるとき、というのは政治的なもの、国家的なものからの逃避というパターンは、円了の三〇年代の一面をとらえてはいないかと考えられるからである。

その四は、井上円了の思想活動の評価である。池田英俊は円了の通俗哲学啓蒙家としての高い評価は「明治一八年

の東京大学卒業前後から、日清戦争の勃発する同二七年の「仏教哲学系統論」が出版されるまでの一〇年間」であったと冷静にみている。哲学の普及という大きな役割を円了が果たしたことは、同時代の大方の人が認めるところである。しかし円了の愛理はこの辺りで終ったとみられる。円了の啓蒙活動に刺激されて、仏教革新を呼ぶ声は各所に起ったが、村上專精せんしよの「仏教史林」(明治二七年創刊)による仏教徒運動では「かつて熱烈な心情のもとに叫ばれた護法即護国観や、護国愛理の護教主義が全く影をひそめ」たといわれ、批評的精神を基調とした仏教の自由研究、歴史的研究が進められていった。この間、円了はひたすらに哲学館校舎を小石川原町の現在地(東洋大学)に移すことと、妖怪学研究という迷信打破に専念し、明治三〇(一八九七)年新校舎が落成した。これは「日本人」第五十七号(明治三・一〇・一八)に報道されている「哲学館の拡張」のため資金一〇万円を募集した、私立大学構想のいちおうの目標達成であった。円了は明治三五(一九〇二)年第二回世界周遊の旅に出た。その間ミューアヘッド事件が起るが、ひたすらに文部省の大学の自由弾圧に堪えた。そして翌三六年帰朝後、和田山の哲学堂建設に着手し同三七年これは完成する。一方哲学館大学は同年開校し、「将来の目的事業」は一六年ぶりに達成される。しかも、それから二年後の明治三九(一九〇六)年には、円了は学長を退いて哲学堂に隠棲する。

その後の井上円了は、明治二三(一八九〇)年教育勅語発布の年から一念発起した全国巡回、勅語の精神普及の運動に専念したのである。円了は哲学館時代にも、卒業生に「扶翼皇運」と大書した揮毫をよく贈ったという。<sup>\*14</sup>しかし校友・田中善立代議士の回想によれば、大正七(一九一八)年、第三代学長大内青巒の辞任に際し、田中は円了の学長就任を説得したが、「先生は何時になく甚しく禁厳きんげんなる態度にて、御説一応尤もなるが、現代政府の教育方針は依然官僚主義にて、自分の宿論たる自由開発主義に相戻もどる故」と断乎拒絶したという。<sup>\*15</sup>

ここに井上円了の愛理の真骨頂がみられると思うのだが、妖怪学の「外道哲学」は一生の失敗作と自認し、東洋

の書四万冊を蒐めた哲学堂も、「独立自由の田園哲学者としての志望を遂行するに及ばずして終った」モニュメントといわれる。哲学堂本尊の扁額の下に記された「南無絶対無限尊」の唱念も空しく響くのである。

以上は略譜をたどった明治三〇年代の円了の簡単なスケッチであるが、井上円了の思想活動が、のちに谷本富（文博、東大教授、批評家）のいうように、「仏教活論」も「禪宗哲学」も「外道哲学」も、今日の眼を以てしては「多く言ふに足るものとは思ひ難し」<sup>\*17</sup>などと忌憚なき批評を浴びている。

いったい円了の哲学の限界はどのあたりにあったのか、それはポイントその二、三と関連しているが、早くから始められた教育勅語普及の教育行脚にあげくれた晩年について、その思想と行動をどう評価すればいいのか。明治二〇年代の新文化創造のナシヨナリストとしての円了の役割は、この教育行脚で継続されていたのか、あるいはここらで、その火が消えてしまっているのか、評価の分かれるところである。ただ円了としては、自らの思想のままに、生きたことは明らかである。

以上が、この小論研究過程において残された疑点の主なるものである。

なお最後におことわりしておきたい。この小論は、もともと小生のマスコミ史研究の副産物であって、陸羯南の新聞「日本」研究から派生し、三宅雪嶺の雑誌「日本人」に及び、「日本人」を発行した思想団体である政教社の同志に井上円了の名を発見し、円了の活動を主として「日本人」誌上に追って、これを明かにしようとしたものである。

明治時代の思想史、とくに宗教学の門外漢である小生にとっては、小論に定めた当初の標題の課題は、まことに手に余るものであった。多くのことが、まだ研究不足のまま、書き残された。福沢諭吉の私学思想、「明六社」と政教社との比較、徳富蘇峰の平民主義の政教社の日本主義との対立と一致、その他である。

しかし、政教社のナシヨナリズムにおける国粋主義、日本主義・国民主義が、井上円了の「護国愛理」と深く結び

ついで、田了の提起した問題意識は、田了のおかれた時代と、そのイデオロギー状況に規制されながらも、田了はその思想を田了その人独自のものとして展開していった。「その思想の軌跡と経験の行程をしらべる」こと<sup>\*18</sup>に、大きな関心をもった。井上田了の「護国愛理」についても田了の理念の新しい展開が私立哲学館、すなわち現在の東洋大学に各方面から提案されていることは喜ばしいことである。大学の反省として、また前進のために。

〔註〕

\*1 「ナショナリストたちの肖像」鹿野政直、p 30、「日本の名著」三七、中央公論社・昭和四六年。これは「日本」創刊号（明治三二・二・一一）における羯南の一連の論説の姿勢であった。

\*2 同上、p 30、「日本人」第二十二号（明治三二・二・一八）の社説は「君主独裁制の国家に生息する人民ハ、之を臣民と称するこそ適当なるべしと雖も、立憲君主制の国家の住民をば之を国民と呼ばざるべからず」とのべている。

\*3 「自由主義如何」陸羯南 p 130「日本の名著」三七、中央公論社

\*4 「日本人」第三十一号 p 15

\*5 「日本人」同 p 13

\*6 「仏教活論序論」緒言、p 72、「仏教」現代日本思想大系七、筑摩書房（ここでは原文は現代用語で書き直されている）

\*7 日本主義運動の開明性の透明度については池田英俊「明治の新仏教運動」p 245、（前掲）につきのような指摘があり、同感である。

「政教社同人の国粹保存の思想運動は、伝統文化における真善美の保持とともに、つねに国民の福祉が予想されていたという。田了の国粹主義の立場には、愚民の思念と智力が上流社会に対比して劣っているとみなしていた点に、他の同人たちの思想活動とは本質的に異なる側面があったことに注目を向けなければならない」

\*8 「戦中の戦後の間」丸山貞男、p 231～p 232、みすず書房・一九七六

\* 9 「平民主義」—蘇峰は明治一九年「将来の日本」で平民主義を謳い、「上等社会より社会の下層、多数の平民の生活世界を近代化せねばならない」とし、民権運動は市民生活を越えた世界に政治をおいたが、政治を生活社会に密着させ、平民こそ政治の主人公となるべきことを説いた。平民主義は土族主義と対立し、条約改正反対では国民主義に接近した。（徳富蘇峰）松本三之助、p 49 ~ p 51、「日本の思想家」二、朝日新聞社・昭和三十八年参照

\* 10 「陸羯南—人と思想」丸山真男 p 249 「戦中と戦後の間」（前掲）

\* 11 「日本ナショナリズムの研究」木村時夫、p 78、前野書房・昭和四一年

\* 12 「明治国家の思想」丸山真男、p 232 「戦中と戦後の間」（前掲）

\* 13 「明治の新仏教運動」池田英俊、p 275、（前掲）

\* 14 「井上田了先生」前教授菊池久吉、p 264、東洋大学刊

\* 15 同上、p 291

\* 16 同上、常盤大定、p 305

\* 17 同上、谷本富、p 337

\* 18 「民権論とナショナリズム」橋川文三、飛鳥井雅道、河野健二、p 181、「近代日本社会思想史」I、有斐閣・昭和四九年

「日本人」における円了論文リスト（哲学館関係広告を含む）

号 題 名

明治年月日

一 日本宗教論緒言

二一・四・三

四 日本宗教論（其一）

二一・五・一八

六 同 （其二）

二一・六・一八

七 同 （其三）

二一・七・三

八 同	(其四)	二二・七・一八
九 井上田了の欧州周遊日記		二二・八・三
一二 宗教論	(其五)	二二・九・一八
一六 坐ながら国を富ますの秘法		二二・九・一八
一六 欧州周遊日記(第二回)		二二・一一・一八
一七 坐ながら国を富ますの秘法	(承前)	二二・一二・三
二〇 同	(承前)	二二・一・一八
二九 強兵策		二二・七・一八
三〇 生が将来の目的事業に就て一言を述へ以て知友同志に告ぐ		二二・八・三
三一 同	(承前)	二二・八・一八
三一 日本主義の大学(雑報)		二二・八・一八
三一 哲学館員募集広告		二二・八・一八
三三 生か将来の目的事業に就て一言を述へ以て知友同志に告ぐ		二二・九・三
三三 同	(丁)	二二・一〇・二七
三四 哲学館広告		二二・一一・三
三五 哲学館と郁文館(雑報)		二二・一一・一八
三六 或人の質疑に答ふ		二二・一二・八
三七 哲学館講義録(広告)		二二・一二・一八
三八 世の女子を有する人に告ぐ		二二・一・三

三九 世の多事多忙の人に謀る

四一 妻帯禁制宗諸師に望む

四二 井上田了氏か妻帯禁制諸師に望むの文を読て更に禁妻宗諸師に望む（島地黙雷）

四三 野遊の五徳を述へて学生諸君に告げ併せて市外に遊園を新設する必要を論す

四四 神仏判然を論じて神道諸士に望む所あり

四五 廃娼論者に告ぐ

四六 廃娼論の次に起るべき問題

四七 旅店改良案

四八 肉食妻帯を論して宗教改良論者の参考となす

四九 日本の寺院僧侶は果して過多なるか

五〇 我邦宗教社会にありて当路事を執る人の参考迄に

五一 宗教家として宜く慈善事業を起さしむへし

五四 再び神道諸士に望む

五六 仏教と日本国

五七 哲学館の拡張（雑報）

亜細亜一五 埋葬論について一言す

一一三・一・一八

一一三・二・一八

一一三・三・三

一一三・三・一八

一一三・四・三

一一三・四・一八

一一三・五・三

一一三・五・一八

一一三・六・三

一一三・六・一八

一一三・七・三

一一三・七・一八

一一三・九・三

一一三・一〇・三

一一三・一〇・一八

一一四・一〇・五

本稿は『東洋大学社会学研究所・年報X』所収の論文であるが、本研究会第四回研究報告なので、研究者の要望もあって、本誌に再録した。